版画によるユマニテの表現 ―ボーヴォワールの『人間について』を指標に、規範と感覚のズレについて考察する―

Expression of humanité by printing －I consider a discrepancy between the public moral and the sensibility of human with "PYRRHUS ET CINÉAS" which was written by Simone de Beauvoir. －

吉村　英里子
YOSHIMURA Eriko

キーワード：ズレ（齟齬）、ユマニテ、トレース（跡をたどる行為）、享受する、積み重ねる
Keywords：discrepancy、humanity、trace、recognize my work、lamination

I'm concerned with a discrepancy that it occurs between " in my mind " and " in my body " .I have an interest in "PYRRHUS ET CINÉAS" which was written by Simone de Beauvoir. She mentioned "humanité(humanity)" in that book. I think that "humanité" is lamination of actions that we have been selected. Continuity of my action are layer and evidence that "I'm here". I believe that it leads to the presence of "humanité".

１．自身の、身体と意識の間で起こる、ズレ（齟齬）について

「私たちはなぜ、私たちの身体を、自分の身体だと疑うことなく自認することができるのだろうか。なぜ、この身体が、自分の身体だと理解した上で生きていくことができるのだろうか。」

私がそのような疑問を感じるきっかけとなった事例は、自身の、女性の月の物であった。月の物は、自分の思うようにコントロールすることができない、女性の身体的な特徴のひとつである。もちろん女性は、胸や皮膚の柔らかさ、臀部の大きさなど、他の身体的な特徴を自身でコントロールすることができるわけではない。

自身の身体をコントロールすることができない上に、自分の身体が女性であるという事実を、誰かに何度も通告されているような感覚は、私にとって、不快でありながら受け入れざるを得ない現実であった。それは、私の身体であると同時に、私の身体ではなくなる（自分の身体であると認識ができなくなる）瞬間でもある。このような感覚は、合田正人の『レヴィナスを読む〈異常な日常〉の思想』に出現する、以下の言葉に置き換えることができると私は考える。

「私が私であるという」繋縛から逃れたいが、逃れることはできない。[1]

私は、「私が私である」ことに対して、決してネガティブなイメージを抱いているわけではない。自身のうちで生じている齟齬（ズレ）そのものに対して、嫌悪も抱いていない。ただ、自分の身体を思うようにコントロールすることのできないもどかしさを、身体の所有者であるはずの自分自身が、なぜ感じてしまうのか、について興味を抱いているだけである。

修士課程の２年を通じて私は、このように自分のうちで生じる、身体と意識のズレ（齟齬）について考え、それを表現することを試みてきた。

２．私たちの超越論的な原型を詐称する、経験的身体の「イメージ」

自分のうちで生じる、身体と意識のズレ（齟齬）を考えるにあたり、私はまず、自身の問いの発端となった「性」に焦点を当てることにした。「性」という言葉を通じて私は、生物学的な性差と、社会的な性差の存在を知る。そして、そもそも私たち人間は、そのどちらの枠組みからも抜け出すことができないということを理解する。そのような構造は、ただの人間の所属、つまり社会によって築き上げられた規範（モラル）であり、決して、私たち自身を指す言葉ではない。

規範（モラル）とは、ある社会が、私たち人間を統制しやすいように作り上げたルールであり、ひとつの秩序である。そのため、社会が都合よく築き上げたそのような規範（モラル）と、その規範（モラル）に違和感を覚える自身の感覚との間で、ズレ（齟齬）が発生してしまうのだと言える。これについて、私は、日本の哲学研究者である合田正人の言葉を借りる。

「女性的なもの」と「エロス」の観念を唱える一方で、「性差」に先立つより高次の超越論的次元へ赴こうとしながら、レヴィナスは、家に住むものとしての「主婦的身体」、愛撫されて恥じらいつつも喘ぐ「女性的身体」、膨大な数の精子（無数の未来）を撒く「父性的身体」、子を孕む「母性的身体」等々を、人種、血縁関係ならざる人間関係の「比喩」として語っているのだが、そうした「比喩」こそ、ある社会制度のなかで構築された経験的身体の「イメージ」を模写したものではなかろうか。経験的な写しが超越論的な原型を詐称しているのではなかろうか。[2]

私たちは、“ある社会制度のなかで構築された経験的身体の「イメージ」”、つまり「男性」や「女性」、「父親」や「母親」、「日本人」や「外国人」というような定型に私たち自身を当てはめることで存在している。そのように誰にでもわかる名称は、私たちに安心感をもたらす。もちろん、私もその確かさを理解することができる。それは、生きていく上で必要なわかりやすさであると言える。しかし、人間の所属が“越論的な原型”、すなわち私たちの実体、をごまかしていることも実際に事実である。そのようなごまかしこそ、私が感じている、自身の、身体と意識のズレ

（齟齬）の核心であると考え、“越論的な原型”について私は探ることにした。

３．超越論的な原型とは

「“超越論的な原型”、つまり属す場所を持たない人間、どこにも依拠することのない私たち、はどこに存在し、いったい何者であるというのだろうか。」

以上の問いを考える上で私は、フランスの哲学者、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『人間について』（訳：青柳瑞穂）を手がかりとした。現在私は、この本の中で登場する、【ユマニテ】という言葉に着目している。【ユマニテ（humanité）】とは、humanity のフランス語であり、日本語では「人間の本質」を意味する言葉である。

彼女は人間を、【個人】としてだけでなく、大きく一括りした【人間】として捉え、それについて思考していた。彼女が関心を寄せていた、この【人間】が“超越論的な原型”であると私は考え、【ユマニテ】という言葉から、自身のズレを表現へと導くことにした。

４．【ユマニテ】とは①

彼女がわれわれを介して自分の存在を実現すべきためには、そして、なおかつ、彼女が存在しているためには、彼女は自分の存在から切り離されている必要があります。[3]

【ユマニテ】とは、私という【個人】であると同時に、その【個人】から切り離された存在であると私は考える。

私でありながら、私と分かれた存在、とは一体どのような状態であるのだろうか。それについて、【個人】の存在と、各々の行為がポイントになると言える。

行為は、われわれがそれを完了する瞬間に立ちどまるわけではなく、未来に向って、われわれから逃げ去るのです。[4]

人は決してどこにも到達しません。出発点しかないのです。[5]

【個人】は常に、自身の目的を追い越し続ける。つまり【個人】は、過去から未来へ向かっていく流動体であり、【ユマニテ】は、そのような【個人】を、【個人】の行為を、包囲している全体であると私は考える。

また、【個人】の存在について彼女は以下のように言及する。

初めから、人間はたがいに倚りかかっているわけではありません。なぜなら、初めから、彼らは存在しているわけではないのですから。彼らは今後存在すべき筋合いのものなのです。[6]

誰かがこの世界からいなくなったとしても、新しく誰かがこの世界にやってくる。私たち人間は、現実の、そのような繰り返しの中で存在し続けている。しかし、それは決して循環ではない。【個人】は、時間の一点にしか存在することができず、その存在をもともと設計されているわけではない。この【個人】たちが、【人間】という大きな流れを生み出しているのである。

【人間】という大きな流れについて私は、鴨長明が書いた『方丈記』の、以下の言葉に置き換えることができると考える。

ゆく河の流れはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。[7]

川の流れと同じように、【個人】は、【人間】として、過去から流動し続けている。この大きな流動によって私たちは、あるひとつの【人間】へと導かれているのではないだろうか。この考えを基に私は、【ユマニテ】とは、ひとつの大きな流れであるとともに、その流れによって出来上がる、ひとつの【人間】であると思い描くようになる。

ひとつの【人間】にたどりつくため、私はまず、【人間】のひとつの大きな流れの表現に取り掛かることにした。

５．トレース（跡をたどる行為）（＝ひとつの大きな流れ）

修士１年の後期にて、私は、ドローイングを中心に制作を始めた。ドローイングでは主に、ロール紙とマジックペン、ダーマトグラフを用いる。ロール紙は非常に紙の厚さが薄く、インクが紙の裏に滲み出る。私はその滲み跡に惹きつけられ、何度も同じ線をたどる。滲み跡をすべてなぞる時もあれば、自身で新たに線を付け加える時もある。そのような行為を私は、トレース（跡をたどる行為）と名付けた。

トレースとは、＜登山で、踏み跡。また、その跡をたどること。（デジタル大辞泉）＞であり、転写そのものを指す言葉ではない。私は、そのまま絵を写し取ることを目的とせず、滲み出ている線の跡をたどるという、私の行為に重きを置いている。そのような状態を経て私は、私の選択も、【ユマニテ】の、ひとつの瞬間であることを理解する。

最初、私は、規範（モラル）と感覚のズレを修正する行為としてトレース（跡をたどる行為）を始めた。そのため、連続して描いたロール紙を数枚重ねることで、修正された姿を見つけ出すことができるのではないだろうかと期待した。しかしそれは、規範（モラル）と感覚のズレを修正するための行為ではなく、人間たちの流動する様子を、形跡としてたどる行為であることに私は気付いた。

見つけ出したこの形跡を版画として表現するにあたり、私はさらに、ボーヴォワールが定義した、【ユマニテ】の一文について深く思考することにした。

写真１：中間発表での展示風景

写真２：トレースによって生まれた版下

６．【ユマニテ】とは②

ユマニテは、主観性のため宿命的に孤立させられている自由な人間たちの断続した連続であります。[8]

【ユマニテ】について、彼女が定義したこの一文を紐解くことで私は、版画で表現するという私の意図につながると考えた。

人間たちの断続した連続、とは、先ほどから述べている、【人間】の大きな流れを指していると言える。では、“主観性のため宿命的に孤立させられている自由な人間たち”とは、私たちの、どのような状態を指しているのだろうか。この一文を解釈するにあたり、ボーヴォワールと同時代を生きたフランスの哲学者、エマニュエル・レヴィナスが『全体性と無限（上)』（訳:熊野純彦）の中で言及する、享受という言葉がヒントになると私は考えた。

享受することにおいて、私は絶対的に私のために存在する。私はそのとき他者へのかかわりを欠いたエゴイストである。孤独であることもなくただひとりであり、無垢なままにエゴイストなのであって、たったひとりで存在している。[9]

享受とは、＜受け入れて自分のものとすること。（デジタル大辞典）＞である。私たちは互いに、なにかひとつの共有し合えることがあったとしても、すべてを共有し合うことはできない。そのため、享受によって私たちは“主観性のため宿命的に孤立させられている”のだと言える。

では一体、どのような享受によって私たちはたったひとりで存在し合うというのだろうか。以下のように言及を続けるレヴィナスの享受について、私は考えることにした。

享受とは、私の生を充たす内容のいっさいについての究極的な意識であり、享受はそれらの内容すべてを包み込んでいるのである。私が手にする生は裸形の存在ではない。私が手にするのは、労働と糧によって生きられた生である。糧とはそこでたんに生の関心を占めるだけではなく、生を「占領し」生を「楽しませ」る、さまざまな内容である。生とはそうした内容の享受なのである。[10]

生の内容とはつまり考えること、食べること、眠ること、読むこと、はたらくこと、日なたぼっこすることなのだ。[11]

自身の生を様々な形で享受すること、つまり、勉強し、美味しいものを食べ、日中に微睡を感じることによって、私たちは、たったひとりで存在することができるのだと言える。

【ユマニテ】とは、そのように生きる人間たちが流動し続けることによって生まれる、大きなひとつの流れであると同時に、あるひとつの【人間】になる計画（人間の存在だけでなく、人間が培ってきた、そしてこれからも築き上げていくだろう歴史や文化をすべて包囲する、運命と私は例えたい）であると私は考える。

この理解を基に私は、自分が行なってきた活動が享受の一部であると考え、自身の行動を振り返ることにした。

７．享受する（＝自身の行為を認識する。）

自身が行なってきた活動として、私はまず、修士１年時の制作についての整理を試みる。

わたくしのものがなんであるかを知るためには、わたくしが実際になしていることがなんであるかを知る必要があります。[12]

修士１年時に私は、「性」を基に、女性である身体から抜け出すことを目的として表現を行なっていた。この表現にあたり私は、女性の身体でありながら胸や局部のない人間の身体、をシルクスクリーンで表してきた。制作を進めていく中で私は、たとえ身体の一部が失われたとしても、私たちはすでに、人間の定型を知っているということに気付く。そのため、この身体から抜け出すことは不可能であり、途方もないことであると理解する。

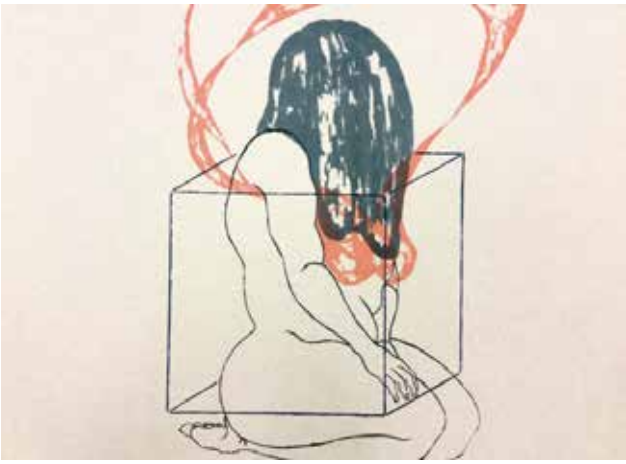

写真３：「性」を基にした作品

さらに、なぜシルクスクリーンを用いるのか、という自身の意図も不明瞭であったため、一度版画での制作を中断し、ロール紙でのドローイングを始めることにした。

ロール紙に描くドローイングにより、私は、自分の行為を追っていく状態に気付く。そしてその様子が、形跡となって残っていることを見つける。この形跡全てを、ひとつに集約する手段として私は、改めて版画を用いることにした。特にシルクスクリーンは、描きだした線をそのまま感光し、絵が反転することなく刷ることができる。そのため、

今まで描き出したドローイングを、ひとつに重ね合わせることで何かが見えてくることを私は望んだ。しかし、ただ線を重ねただけでなにかひとつの姿につながることはなく、むしろ、一つひとつのドローイングが互いに邪魔をするだけで、描いた線がすべて曖昧となることがわかった。

写真４：ドローイングをひとつに重ねた作品

写真５：シルクスクリーンによるドローイング①

写真６：シルクスクリーンによるドローイング②

その次に私が始めたことは、ひとつの形を何度も刷ることであった。この行為も、ただ単純な行ないにしかすぎず、なにか新しい形が生まれることはなかった。しかし、刷るたびにインクを洗い流していた際に、自身の行為をひとつずつ獲得している感覚に私は気付く。それと同時に、「型を用いて刷る」ことが私の中で浮かび上がってきた。

私はまず、厚紙の型を用いるところから始めた。描かれている人間の形をなぞった厚紙やジェッソを塗ったロール紙などを型として用いた時、自分が予想した以上に、その型が表面に浮かび上がってくることがわかった。また、型が浮かび上がりやすい媒体として、私は和紙を選択する。和紙は薄いため、20 回程度の刷りでも型が表面に浮上しやすく、変化をつけることが容易い。私はこのように、ひとつの着眼点に併せて、様々な要素に関連性を見出すようになっていった。そして、制作のために自分が行動してきた一点ずつが､すべてつながっていることを私は理解する。

> *完全にわたしに属している唯一の現実というのは、とりもなおさず、わたしの行為です。つまり、わたくしのものでない材料で作りあげられた作品は、早くも四方八方へと、わたくしから逃げ去って行きます。わたくしのものであるもの、それはわたくしの計画の完遂です。*[13]

どれだけズレ（齟齬）に違和感を覚えても、私の身体、そして身体を通して内在するそのような意識は、現実に私のものである。私は、そのように私に内在する意識を、材料として、作品を作り上げる。作品を含め、そのような行為は、私自身のものである。私は、このように自身の行為を認識することを、享受することと同意であると考えている。

私はこの享受をひとつの形跡と判断し、積み重なっていく自身の行為をシルクスクリーンで表現したいのだと気付く。ここにきて私はようやく、シルクスクリーンという技法を用いる理由が制作に結びついていることを自覚する。

写真７：「ユマニテ」

写真８：「ユマニテ」

写真９：「ユマニテ」

写真 10：厚紙やジェッソを施した型①

写真 11：厚紙やジェッソを施した型②

８．積み重ねる（＝あるひとつの【人間】）

事物とわたくしの関係は、あらかじめ与えられているわけではありません。かたまっているわけではありません。わたくしは、その関係を、一瞬一瞬に創造するのです。或る関係は死に、或る関係は生れ、また他の関係は復活します。ひっきりなしに彼らは変化します。[14]

【人間】は、流動する。その流れの中で【個人】は、関わりの深い人と別れ、新しい事物や人と出会っていく。あるいは突然、関係のなかった事物や人と関わるようになるのかもしれない。それは、私たち人間が流動的であると同時に、変化しているために築いていくことのできるつながりである。

誰もが、生まれた時と現在で、自分を含め周囲の環境が大きく異なる。実際に、20 年前では考えることもできなかったテクノロジーの発達を例に浮かべるとわかりやすい。10 年前、２年前、昨日、１時間前の私たちは、時代の様子によって全て異なる存在であり、決して同じ状態でいることはできない。そのように【個人】の経験や体験が積み重なっていくことで私たちは、あるひとつの【人間】になるのかもしれない。

また、積重の表現として、私は、シルクスクリーンが適切であると考えている。一般的に版画は、大量のエディシ

ョンを作成することを目的とする。しかし私は、一つのスクリーン版を用いて、同じ作品を作らないように心掛けている。時間の経過によって刷る色を変え、凹凸ができる刷り方を行なうことで、私は作品に差異を作る。そのように、自身の行為と自分の有する時間を積み重ねていくことが、自身の行動を認識するひとつの形であると私は考えている。【個人】であり【ユマニテ】でもあるひとりを、そしてあるひとつの【人間】を、私は表現している。

さらに私が行為した痕跡として、私は、スクリーン版に映し出される絵にも注目している。ひとつのスクリーン版を用いることは、【人間】の定型であり、また、同じ場所に刷り続ける行為は、痕跡をたどるひとつの行為であると見なしている。

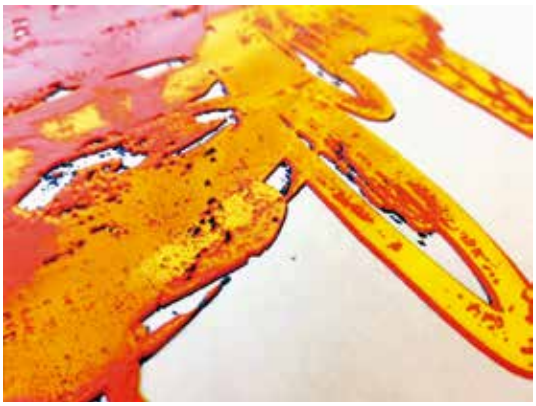

写真 12：積み重なるインクの様子①

写真 13：積み重なるインクの様子②

写真 14：「流体」

9．まとめ

私たちは、五体であれば、その存在を人間であると認識する。私はそれを意識し、何度も人間の形をドローイングしてきた。描き続けていく中で私は、身近な人たちだけでなく、顔も名も知らない人たちの積み重ねの上に、自分が存在していることを自覚するようになる。そのような意識が、「ユマニテ」という言葉へ導いてくれたと私は感じている。

現在、修士課程の２年間を通じてたどり着いた、以上の成果を基に私は、さらなる制作を試みている。例えば、作業において、インクの種類や重ね方、どのような型を用いるとより形が浮かび上がってくるのか、という実験を繰り返している。私は、そのような経過によって、制作が次の段階につながると考えている。さらに、このように制作を続けていく中で私は、自身の描く人間の形や、使用する色についても理解が深まると感じている。

今後も私は、自身が感じる規範（モラル）と感覚の齟齬を通じて、版画によるユマニテの表現の研究をさらに深めていきたいと考えている。

参考文献

1．合田正人：レヴィナスを読む〈異常な日常〉の思想、p.119、筑摩書房、2011
2．合田正人：レヴィナスを読む〈異常な日常〉の思想、p.110、筑摩書房、2011
3．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.53、新潮社、1955
4．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.60、新潮社、1955
5．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.63、新潮社、1955
6．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.57、新潮社、1955
7．鴨長明：『方丈記』、1212 年成立 http://www.aozora.gr.jp/cards/000196/files/975_15935.html
8．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.60、新潮社、1955
9．エマニュエル・レヴィナス（訳：熊野純彦）：全体性と無限（上）、p.257、岩波書店、2005
10．エマニュエル・レヴィナス（訳：熊野純彦）：全体性と無限（上）、p.214、岩波書店、2005
11．エマニュエル・レヴィナス（訳：熊野純彦）：全体性と無限（上）、p.215、岩波書店、2005
12．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.22、新潮社、1955
13．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.17、新潮社、1955
14．シモーヌ・ド・ボーヴォワール（訳：青柳瑞穂）：人間について、p.19、新潮社、1955